

2009年晩秋のことだ。ライシャワー東アジア研究所(ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院)に入入りしている知人から、息せききったような電子メールが届いた。

「驚きましたよ、何せいきなりハラダ・タケオという名前が出てきたのですから」

知人曰く、何でもその時、東京のアメリカ大使館から帰任したばかりの人物が研究所内でセミナーを行ったのだという。東京では「日本メディアによるアメリカ関連報道」をウォッチするのを仕事にしていたという人物。セミナーの冒頭で「対米論調という観点で最も危険な日本人として注目している人物」の名を3名挙げたのだという。すると大前研一氏(株式会社大前・アンド・アソシエーツ代表取締役 日下公人氏(日本財団特別顧問)と並んで、私の名前を彼は挙げたのだ。それで驚いたとばかりに知人は急いで電子メールを送ってきてくれたというわけである。

もっともこの程度のもので驚くべきではない。そもそもこのように私の耳に届くことを織り込みながら彼らとしてもあえてそうしているはずだからだ。この世界では、言ってみればこうしたことが挨拶代わりで普通に行われている。私からは別のルートを使って「ご挨拶」を返しておいた。しかし、それよりもっと気になったのはいわゆる「反米論者」として知られる日本人の「論客」たちが全くそこでは言及されなかったという事実だった。いずれにせよ、なぜアメリカ勢は日本勢をいまだに徹底して監視し続けるのか。――外務省に在動していたある時から知ったこのことに対する答えをいつか出そうと心に決め、私はこれまで一連の活動を繰り広げてきた。しかもそうしたアメリカ勢による対日監視には明らかに二つの「感情」が込められてきていることも気になって仕方がなかったのである。一方で冷徹な眼差しで日本勢の持つ富を狙っている。その時、アメリカ勢は時に憎しみに近い感情に突き動かされている。

しかし他方では明らかに羨望の眼差しで日本勢を見つめてきたのがアメリカ勢なのだ。表向き分かる「国富の大きさ」や、教科書的な意味での「歴史の長さ」などからは全く説明のつかない、アンビヴァレントな感情がそこには常に見え隠れしている。

このことを真正面からテーマに取り上げて本書こうと思ったのは2009年夏のことだったが、私にしては珍しく、半年近くをかけてこの本を仕上げることにし、結果としては幸運だったと思っている。なぜなら幸運なことには、この本を書くべく動き、調べると、多くの方々と出会い、そしてまた新たな角度から思考を掘り下げることが可能となったからだ(その意味でこの本は第四章で紹介した「シンクロニシティ」の塊のような本なのかもしれない)。この半年という隙間をあえてもうけなければ、そうしたことは全く不可能であっただろう。

日本勢と華僑・華人ネットワークが共同管理してきた薄外資産としての金塊というテーマの性質上、どうしても全てを書ききれなかったことをどうかご容赦頂きたい。しかし、読者の方々には、「インターネットで検索しても出てこないから真実ではない」「本で調べても見つからないから嘘だ」などと間違っても短絡的に考えて頂かないように心から願っている。「シンクロニシティ」によって、本当に必要な人へ、本当に必要なタイミングで、本当に必要なことは必ず伝わるようになっていくのがこの世の中なのである。今、世界に求められている、リスク回避という意味での「利他的な行」のためにはそれだけを知れば本当は十分なのだ。偶然にもこの本を手にとった読者の方々には、薄外資産としての莫大な金塊が放出される「その時」を念頭に置きながら、「それでは自分としてその時一体何が、世界のために出来るのか」を今の段階から考えて頂ければ幸いである。そしてそうした思考を促すことこそ、「世界の中の日本を生涯考えつづける者」という意味で一生

『外交官』でありつづける」ことを5年前、胸に誓った私が今担うべき役割なのだと思うている。

これまでの本同様、この本も大勢の方々によるご支援・ご協力がなければ出来上がらなかった。その中でもとりわけ、弊研究所の担当・飯島直己君に対し、この場を借りて心から謝意を記しておきたいと思う。なぜなら、2009年夏、珍しく考え込んでしまった私を次のフエーズへと推し進めてくれたのは飯島君がかけてくれた次のような言葉だったからだ。

「マーケットについて云々する人は山のようにいます。そして、アメリカについて論ずる人も大勢います。しかし、代表(＝私は研究所内で呼ばれている)の本がこうした人たちの本と違うのは、ドイツ憲法学を中心にヨーロッパの哲学・思想を踏まえているということではないですか。私は是非、次の本でそうした意味での思考の続きを読みたいと思います」

私はこの言葉を聞いて、胸の中の澱が一気に消え去るのを感じた。そして思い出した。4年間にわたるドイツ在動中、時に凍えるような寒さとなっても、カール・シュミットを中心としたドイツの思想家たちの分厚い本にかじりついていた頃のことを。あの時、訳も分からずに私が思念の中で追いつめていた概念が「統合(Integration)」であった。なぜそう思ったのかは分からない。しかし、きっと必ずこれからこのことについて考えたことが大きな意味を持つだろうと漠然と信じる形で、日々、読書に励んでいたのである。

第四章で書いたとおり、これからの時代を貫くテーマ、それは「他者」への思い、さらには「多様性」だ。「自分以外の者たちは全て誤っており、だから彼らは敵であり、殲滅されなくてはならない」という強迫観念に取りつかれ、極限まで加速し、肥大化してきた米欧勢の金融資本主義は明らかに行き詰まってしまった。さすがの彼らでもこのことに気が付き、明らかにそれは異なるモデルを自らの起点に立ち返ることで追いつめ始めている。そこで出てきたのが一度は忘れられたはずのこれらの事柄だったというわけなのだ。

しかし、「多様性」というと聞こえはいいが、バラバラになるということも意味している。人間は決して独りで生きることが出来ない。お互いに助け合うことが必要である。だからこそ二人以上の人々が寄り集い、まとまっていくなという意味での「統合」が次なるテーマとなってくる。――飯島君がかけてくれたこの言葉をきっかけとして、大きく地平が開け、この頁まで私の筆は辿りつくことができた。心からお礼を申し上げます。

そしてもう一つ。本書が出来上がるためには私からの申し出をご快諾頂いた「SAPPO」編集部の飯田昌宏前編集長、及び工藤昌吾副編集長の「ご尽力が不可欠だった。この場を借りて同じく心からお礼申し上げますこととしたい。どうもありがとうございました。

最後に読者の方々に申し上げておきたいのは、世界史は今、私たち日本人の一人一人を試しているということである。しかも、どうやらその時間はそれほど長くはなく、下手をすると2011年頃までしかないのだ。確かに今は苦しい時代だ。しかし、だからこそ利己的になるのではなく、「稼ぐが勝ち」と騒ぐのでもなく、次の時代を見据えた模範となる思考と行動を身の回りからまずは始めていくことが求められているのだ。

そのことの意義をシェア出来る未来の仲間たちとの出会いを、私は今から心より楽しみにしている。

2010年5月吉日

東京・国立市の我が研究所オフィスにて

原田 武夫記す

お申込み用紙

貴社名		部署名	
お役職名		お役職名	
ご氏名		ご氏名	
お役職名		お役職名	
ご氏名		ご氏名	